

常葉美術館所蔵「大塚荷溪宛浦上玉堂書簡卷」について

川 延 安 直

はじめに

江戸時代には、池大雅・与謝蕪村ら文人画家と呼ばれる画家が活躍し、わが国の近世絵画史を豊かなものにしていく。中でも浦上玉堂は、彼ら文人画家を代表する存在であると同時に異彩を放つ存在でもあった。

琴、詩、書、画はいずれも文人必須の教養とされるが、玉堂はこれらすべてに通じていた。書画についての能力を有するのは文人画家であれば当然であるが、玉堂は琴と詩にも優れ、特に琴については自らを琴士と呼び、これを生涯の友として深く愛好した。

中国文人の主要な担い手である「士大夫」は、経済的に独立した存在で、彼らにとつて琴、詩、書、画はあくまで趣味の世界に属するものとされ、生活の糧を得るためのもではなかった。しかし、日本には士大夫に相当する階級は無く、文人画家のほとんどは絵を売ること以身を立てる職業画家であった。

多くの日本の文人画家と玉堂が大きく異なる点は、玉堂が琴、詩、書、画すべてに通じていた事と、あくまで職業画家であることを拒否する姿勢を貫いた事であろう。この点において玉堂は日本を代表する文人画家となる。玉堂は自らを琴士と規定し、自作の絵を売ることには無かったという。実際に自作の絵によって厳密な意味での報酬を得るこ

とがまったく無かったかどうかは分からない。だが、「玉堂琴士集」など残された音楽論・詩集等の著作に見られる玉堂自身の発言には、専門家、職業人となる事を戒め、あくまで「自娛」の立場に拠って立つ自由人であろうとする強い意志が窺える。

玉堂の自由人たろうとする強い意志は単にポーズであったのか。それとも、実際に意志を貫き実践したのか。人間はパンのみに生きるのではないが、パンが無くては生きていけないのも事実であり、自由人であり続けるためにはやはり何らかの経済的裏付けが必要である。卓越した琴、詩、書、画の能力を持ちながら、それを生活の糧とするのを潔しとしなかった玉堂は、それではどのようにパンを得ていたのであろうか。

玉堂の経歴・行動や交遊関係については、なお不明な点が多く残るにしても、同時代の画家に比べれば比較的詳しく判明している。しかし、玉堂に限った事ではないが、日常生活の細かな事象については知ることは難しい。日々の糧を得るといふあまりに日常的な行動については決して資料は多くないのである。

以下、本小論で紹介する資料によって、玉堂の日常生活

の一端に触れてみたい。玉堂像理解の一助となれば幸いである。

常葉美術館所蔵「大塚荷溪宛玉堂書簡巻」

書簡は、それを書いた研究対象となる人物の肉声を伝え、その人物の心情、交遊関係を知る事ができる貴重な資料である。玉堂の書簡も息子秋琴、画家岡田米山人・半江父子、遠州藤枝の事業家・文人大塚荷溪（一宛てのものなど、幾つかが紹介されている）²。中でも大塚荷溪宛ての書簡はまったく違った教が遺されている。

ここでは、常葉美術館所蔵の「大塚荷溪宛玉堂書簡巻」を紹介したい。本書簡は平成六年四月二三日から六月五日に開催された福島県立博物館企画展「玉堂と春琴・秋琴―浦上玉堂父子の芸術―」に出品され、同展図録にその一部が掲載されている。大塚荷溪宛玉堂書簡は「浦上玉堂畫譜」に数通が紹介されているが、本書簡巻についてはいまだに詳しい紹介はなされていない。「浦上玉堂畫譜」中に紹介されている荷溪宛書簡は、茶碗・書籍などの斡旋、画人の評価に関する内容のものであるが、常葉美術館所蔵書簡巻中

の書簡もこれらとはほぼ内容を同じくする一連のものである。現在は一巻の卷子装にされ、玉堂の書簡や書簡の包、九老なるものから玉堂へ宛てた書簡、荷物の預かり証(じな)ど一二通を含む。また、やはり荷浜に宛てた楼閣山水図の描き方を指南した山水図の草稿、玉堂の山水図略画三図が別の一巻とされている。これらの山水図も大変興味深い資料であるが年記はなく、以下に抜く荷浜宛書簡との関連は明らかではない。これらの山水図についての検討は今後の課題としたい。

玉堂の書体は奔放を極め、解説に正確を期し難く、文意の明瞭でない箇所が少なからずあるが、試みに大略を記してみた。識者の方々のより一層確かな読解をお願いしたい。なお、書簡は巻頭分から順に掲げてあり、年代順ではない。

*書簡一「此間曲追便二愚書呈上仕候：」

まず、以前に送った書簡が到着したか尋ねるとともに、船便の遅れを田畑屋に問い合わせている。

荷は品川まで来ており、近く届くことを確認し、今回見

付けた二品を早便で送った旨を伝え(本状はこの品に添付されたものか)、以前に送った品が気に入ったかどうかを尋ねている。

次に昨年の染物を精算した詳しい勘定書を送ると伝え、さらに新しい品々の形状、寸法ならびに価格などを列記し、まず一両三分を送ってほしい、委細は次便で知らせるとしている。

最後に、旧冬に依頼していた「玉之儀」は心配ないとして結び、日付は正月十一日とある。書簡巻頭部には端裏の書き込みが見え、「亥正月十四日」と読める。享和三年(一八〇三)が癸亥にあたり、本書簡は享和三年のものと思われる。

本書簡は主に文房具の斡旋についての内容を記したもので、染付杯、茶盆、筆、四角大平、瀬戸、煙管、さらに肉池、唐草等の品々が掲げられている。筆三種には略図も添えられている。

また、文中の「直段ハ一篇も引なしニ御座候ノ御氣ニ入り不申候ハ、早速ニ御ノ返却可被下候」、「一向沢山者無之ものノ追て又次手ニ懸御目候間若御ノ氣ニ入り不申候ハ、御返却可被下候」、「成丈下直ニ申付置候得ともノ先様のく

ち様ニ御承知可被下候」といった記述からは玉堂の書画文房の斡旋の様子が窺われ、買手である荷溪と売り手との間で交渉する玉堂の姿を思い浮かべることが出来る。

* 書簡二「清暑御ざ候全家御徳祥…」

本書簡は玉堂独自の奔放な文字が密に書き連ねられており、読解は困難で内容の判然としない部分も多いが、書簡一が文房具を扱うものであったのに対し、書簡を中心に扇子、画帖などの話題に触れている。

時候の挨拶に続き、返事がないが以前に書簡で知らせた通り、明の文人画家沈周の著『沈石田集』や『李竹籟』（竹籟は竹籟と号した明末の学者・收藏家・鑑識家李日華のことか）を入手できる筋があると述べ、写しに取りかかるのに、前金を渡さなくてはならないので、急いで金子を送ってくれるよう依頼している。立て替えてばかりで、金子が残り百疋あるかどうかもおぼつかないと記しており、玉堂の斡旋業の苦労がしのばれる。

さらに、扇百匹分が出来上がったので天王寺屋に渡して良いかという問い合わせ、尾張から大振りの白手茶碗を差

し上げること、『随園庭話』その他の新刻があること、画帖の寸法を取り落としたことなどが列記されている。

六月十一日の日付を記した後、さらに枠外で張月樵（くら絵を頼んでおいた画人達が約束を守らず困ると不平を述べ、重ねて金子の算段を頼んでいる）。

なお、文中に「尾州ヨリ白手ノ茶碗さし上げ申候」、「尾州ニテモ三両三分三月間出候」などであり、玉堂が一時尾張にあつたことを窺わせる。玉堂は文化元年（一八〇四）尾張徳川家の家臣で音楽に造詣の深い平岩元珍（⁵）を名古屋に訪ねているが（⁶）、この名古屋行と本書簡にある尾張滞在が重なるのであれば、本書簡も一応文化元年頃のものと考えられる。

『浦上玉堂畫譜』整理番号二五一の荷溪宛書簡も「尾州瀬戸妙ニ御座候此節白手ノ茗椀大ニ流行いたし候」、「月樵モ俗ニ御座候而如何与被存候」など本書簡と共通する白手茶碗、張月樵の話題を取り上げており、両書簡が近い時期に書かれたものである事を窺わせるが、松下英磨氏の同書簡解説によれば、紙背に「丑四月廿一日」とあることから、同書簡は文化二年（一八〇五）のものとして推定される。本書簡も文化二年六月十一日のものであろうか。

『浦上玉堂畫譜』整理番号二二四荷溪宛書簡にも同じく白手茶碗について「猶々尾州ヨリ茂小白茶碗さし上候相達候乎」とあり、さらに「天王寺屋へ託し扇面モさし上候」とあるのは本書簡で触れている扇百匹分が出来上がったので天王寺屋に渡して良いかという問い合わせに対応するものであろう。

整理番号二五一荷溪宛書簡、本書簡、整理番号二二四荷溪宛書簡は一連のものと考えられるのではないだろうか。

* 書簡三「平安より再三書ヲ呈し候…」

京より再三書簡を送っているものの返事が無く、天王寺屋に尋ねてもやはり便りが久しく来ていないというので案じている旨から書き始めている。

次いで、本題のかねて約束していた『李竹籟集』の事に触れている。京で暑中を過ごし八月一日より大坂へ下り、早速木村兼葭堂の家に遺物の所在などを尋ねたようであるが、書籍文房具など良品は公儀へ上り、残りの品々も多くの者が請い求めているようであったと述べ、以下「雪菴請史」・「竹籟說郭」・「書院叢說」などの書籍名と価格を列

記して、一括購入を勧めている。「說郭」は明の陶宗儀の撰になる叢書、経書・諸史・隨筆・伝記の類、数百種を収める。「鉄網珊瑚」は趙琦美撰になる中国明代の畫著録。「清河書画舫」・「真蹟日録」は中国明末の收藏家・鑑識家張丑の著。「寶繪録」は明の張泰階の撰になり、唐から明までの名画について触れたもの。「清秘藏」は張丑の父張応文撰で同じく張丑が改訂した中国明代の書画骨董鑑定書。(7)

「書籍文房類ヨキ品々ハ公儀へ上り」とは、享和二年(一八〇二)正月の木村兼葭堂没後、その蒐集品が五〇〇両で官に納められた経緯をさすものとすれば、本書簡は享和二年(一八〇二)以後のものとなる。

また、文中「天地堂詩集トテ別ニ有之候ノ是ハ梅屋トリツギぬしヘウリ申候而此方ニ御さ候事」に登場する「梅屋」は十時梅屋であろうか。梅屋もまた書籍売買の斡旋を行っていたようである。

続いて、「金子御イソギ澤山ニ御上シ可被下候」と送金を依頼し、送り先として逗留していた高麗橋筋上人町布屋新左衛門家を指定している。この場所については「心齋橋スジカドヨリニケンメウラ」と注記している。

また、茶碗についても斡旋し、さらに「春岳へモ画帖乞

「置申候事」とある。「春岳」は大坂の画家鼎春岳であろう(8)。最後に玉隣の小品は銀一両すること、玉隣の竹図大幅を送るので依頼人に届けてくれるよう頼んでいる。この「玉隣」は近江の生まれで墨竹をよくした画僧玉隣であろうか(9)。以上が本書簡の概要であるが、およその年代が推測できること、大坂での玉堂の滞在場所の一つが明記されていること、また、兼葭堂の没後、早いうちから蔵品の散逸が始まっていた様子を窺えるのは興味深い。

なお十時梅厓は享和四年一月に没しているので、本書簡は享和二年(一八〇二)の兼葭堂没後、十時梅厓の没する享和四年(一八〇四)一月の間のもものと推定したい。

*** 書簡四「自京非数通発候…」**

本書簡も、京から書簡を送ったものの返事がないという書き出しから始まる。続いて、依頼のあった『李竹籟集』と数種の珍書を送ったが目を通していないのかと尋ね、何分貧士のため空しく宝物を取り逃がした事が惜しまれると胸中を語っている。

次に、荷葉の小茶碗五客を十三両五分で斡旋し、箱代は

八分も掛からないと記し、「此画ノかみ代モ有之百匹御当御存し可被下候」と続く。「此画ノかみ代」とあるのを見ると、本書簡は斡旋した画に添えて送られたものでもあろうか。最後に、過日玉隣の墨竹画も送ったとして結んでいる。日付は九月九日。

なお、梓外に「長崎へハ十月又ハ明春発し申候」とあるのは興味深い。玉堂は文化二年(一八〇五)冬か翌年春に九州に遊んでおり(10)、本書簡中の長崎行の記述がそれに当たるものであろうか。とすれば、本書簡は文化二年(一八〇五)の夏から秋のものと考えられる。また、あるいは書簡六で後述するが、享和二年のものとも推定できる。

*** 書簡五「尔後絶壹壹之…」**

本書簡でも、大坂より送っている書簡の返事がなく、安否を気遣っている旨を記した挨拶に始まり、続いて「長崎ヨリ婦大／坂逗留いたし候明春ハ／東海道帰節いたし可申候」と自身の近況を知らせている。

次いで、本題である依頼のあった書籍の写本について、写し代・紙代・礼金等の費用などに触れている。梓外にも

書き込みがあるが、虫損と欠損のため判然としない部分がある。

また枠外に別の一枠を設け、大坂逗留は二月初めまでの事であると追記している。先の近況を知らせる部分と合わせる、玉堂は本書簡の書かれた年には長崎から大坂へ戻り、翌年二月初めまで大坂に滞在し、その後東海道を行く予定であり、本書簡は長崎から大坂に戻り滞在中、江戸に発つ前年に書かれたものということになる。

玉堂は文化三年（一八〇六）の六月から七月には九州からの帰途、広島の頼春水、神辺の菅茶山を訪ねており、翌四年の冬には田能村竹田と大坂の持明院に同宿しているが、文化五年には江戸を経て、会津・水戸・飛騨・金沢を訪れ京都に文化八年に戻る長途の旅に出ていることから（Ⅱ）、本書簡は文化四年（一八〇七）のものとして推定される。

* 書簡六「別來御疎絶……」

書き出しは通例のごとく返事が来ないということから始まる挨拶である。その中で荷溪の江戸来訪を聞いた由を記している。

続いて本題の書籍の斡旋について触れる。まず先に送った書簡で案内したという『李竹籟集』写本が森川方にあり、価格は四両であることを伝える。森川は大坂高麗橋井池東に住した書家・篆刻家森川竹窓であろう。玉堂は文化元年に森川竹窓のもとに逗留している。

『李竹籟集』の他にも、一〇種の書名と巻数・価格を列記し、兼葭堂の所蔵であった事を記す。既に述べたが、このうち『清河書画舫』・『真蹟日録』は明末張丑の著、『鉄網珊瑚』は趙琦美撰明代の書画著録、『寶繪錄』は明の張泰階の撰、唐から明の名画に触れた書。『清秘蔵』は張応文撰、張丑改訂の明代の書画骨董鑑定書である。

予想外にこれらの書を手でできたのは、森川竹窓が書付を直接送ったためかとしている。四日市にあった菊池五山からも申し込まれており、急いで写し終えないと入手できなくなるがどうするかと急便で知らせている。

大坂薩摩堀願前寺と居所を記し、日付は十二月二十日である。最後に小画を送り、三亥にも書画を送るが如何かと追記がある。この三亥が年記とすると享和三年（一八〇三）が癸亥にあたり、本書簡はその前年、享和二年のものかと思われる。

書簡三・四でも「李竹籟集」に触れており、本書簡との関連が窺われる。書簡三は享和二年（一八〇二）から享和四年・文化元年（一八〇四）の間のものと推定され、本書簡が享和二年十二月二十日のものとすれば、書簡三も享和二年中のものと考えられるのではないだろうか。

さらに、端裏に「此御返事御イソキ ○長崎へハ正月二参候」とあるのが注目される。従来、玉堂の長崎行は文化二年冬から翌年春とされるが、あるいはそれ以前の享和三年（一八〇三）正月にも長崎行が予定されていたのであるうか。書簡四には一〇月か来春に長崎へ行くとの記述があり、書簡四もまた享和二年のものである可能性がある。

*書簡七「金壹両二分二限り…」

本書簡は画と土瓶を斡旋した際の経費の内訳を記したものの。項目としては画料の他に材料費、箱代、運賃が書き上げられてあり、さらに薩摩小土瓶や抹消してあるが御用人への肴代も書き上げてある。

画料のうち、「竹石山水」とあるのは長町竹石の山水画の画料だろうか。金額は二朱。三匁五分は「東溪画料」。東溪

と号す画家は数名いるが、この東溪は「竹田荘師友画録」に載る長崎の人で詩書画をよくし、医術に通じた他、七絃琴の名手でもあった松浦東溪のことであろう。⁽¹²⁾

*書簡八「記 古渡一字無漫滅…」

本書簡は玉堂のものではない。文末に「森川貴書 玉堂老兄 兎左衛門」とあり、玉堂宛て森川竹窓の書簡と思われる。

張丑の『清河書画舫』・『真蹟日録』、張応文撰、張丑改訂になる『清秘藏』、張泰階の撰『寶絵録』。明末の学者・收藏家李日華の『六研齋筆記』、趙琦美撰『鉄網珊瑚』、詩文に秀でた宋の楊萬里の撰『楊誠齋集』⁽¹³⁾、清の銭曾が蔵書について解説した『読書敏求記』など一〇数種の書名が掲げられている。

写本・唐本の別、状態や部数、内容、価格を記し、「書画ノ事ヲ評し本也至而珍書ニ御さ候」、「是ハ大雅堂持本兼葭堂ニ譲候本甚雅事ナルモノ也」との注記もある。

書名を列記した後、急ぎはしないが早目の返事が欲しいと記し、紹介した書籍については書林にも問い合わせるよ

う勧め、最後に「世上に者一切無之もの計ニ御さ候」と結んでいる。

書簡六で玉堂は森川竹窓のもとにある書籍を大塚荷溪に斡旋しているが、そこに掲げられている書名の多くは本書簡のものと同じである。玉堂は森川竹窓からまず書籍の情報を得、それを大塚荷溪に斡旋したのであろう。竹窓、玉堂、荷溪という書籍の流れがここに成立しており、さらにそれら書籍には木村兼葭堂から池大雅にまで遡るものもあつた。

むすび

以上の書簡は、およそ享和二年から文化年間前半頃のものと考えられる。この頃の玉堂は主に京都にあつたようだが、文化元年には大坂、名古屋、文化三年には九州、文化五年には江戸から奥州へと立て続けに長途の旅に出ている。このようにこの時期の大まかな足跡についてはほぼ推測できるのであるが、より日常的な生活の糧を得るための玉堂の行動の一端が本書簡巻からは窺える。

また、書簡には幾人もの人物が登場する。十時梅屋・鼎

春岳・玉澗・長町竹石・松浦東溪らの画人や、書家の森川竹窓、漢詩人の菊池五山らの名を見ることができるのは興味深い。彼らは荷溪ら各地の庇護者とは一線を画す存在で、画、琴、書、漢詩で名をなす才能豊かな人々であつた。そうした一流の才能との交流は、文人玉堂の成長に欠くことのできない無形の大きな財産となつたであらう。

玉堂は旅の折々に、各地の文雅の士を訪ね滞在しており、彼らの援助が玉堂の生活上、重要な部分を占めていたであらうことは想像に難くない。彼らの歓心を買うことは、玉堂にとって決しておろそかにできない勤めであつたと思われる。自作の画を売ることを潔しとしなかつた玉堂の収入を得るための手段に、医薬の術、七絃琴の制作、書画骨董類の斡旋が考えられるが、その主たる相手もまた各地の文雅の士だつたのではないだろうか。その書画骨董類の斡旋も単なる仲介ではなく、玉堂自身がそれらの内容、価値を評価した上で斡旋しているのであり、玉堂の深い知識と教養の程が知られるのである。

玉堂から大塚荷溪に宛てた本書簡類は、有力な庇護者に対する玉堂の書画骨董・書籍の斡旋の様子をかなり具体的に伝えてくれる。荷溪と売り手との間で交渉し、急いで金

子を送るよう依頼したり、画人達が約束を守らず困ると不平を述べ、貧士のため宝物を取り逃がした事が惜しまれると愚痴る玉堂の姿は、一見卑屈とも受け取れるほどだが、画や著書からは窺えない玉堂の一面は誠に人間臭い。

他に類のない独創的画風から、しばしば脱俗孤高の異風な文人画家として捉えられがちな玉堂であるが、確かにそのような面があつたにせよ、一生活者としての日常を窺い知ることもおろそかにするべきではないだろう。「秋琴宛玉堂書状」(出光美術館蔵)⁽¹⁾は、会津藩士となつた秋琴の上京に際して細かな諸注意を与えたものであるが、子を思う親の心情を勘案しても、そこには宿代・食費に細かな注意を払う玉堂の生活者としての感覚が滲んでいる。

類い希なほどに文人の理想像を追い求め行動した玉堂は、舞台では文人の役を見事に演じた。本書簡の行間には「文人」を演じた玉堂の楽屋での一人の生活者としての素顔が覗いている。

なお、荷溪宛の玉堂書簡は本書簡巻も含めて旧蔵者を同じくするさらに多くのものが、現在諸方に分蔵されているものと思われる。ここで紹介したものは、その中のごく一

部に過ぎないが、それでも玉堂研究上興味ある幾つかの事項が含まれていた。今後さらに多くの玉堂書簡が紹介されるのを待ちたい。

謝辞

本書簡巻の調査にあつて、常葉美術館副館長見城春男氏、茨城県近代美術館金原宏行氏に大変お世話になった。東京国立博物館富田淳氏、愛知県立美術館寺門臨太郎氏、藤枝市郷土博物館磯部武男氏、福島県立美術館増淵鏡子氏には文献資料を提供していただいた。また、解説に当たっては本田良彌氏、当館学芸員酒井耕三氏の協力を得た。ここにお名前を記して深く御礼申し上げる。

註

- (1) 大塚家はもともと信州村上家の家臣だったというが、大塚政隆(承応三年・一六五四没)の時、駿河の藤枝に移り、寛文年間頃から酒造業を始め産を成した。一七世紀から幕末に至るまで、蘭学をはじめ、書画・篆刻・香道・茶道・謡曲などの趣味と技芸に秀でた父子が出ている。中でも大塚家の文芸活動が最

高潮に達したのは、亀石とその子情山・珠水・曲阜・荷漢・荷漢の子翠歴の頃である。

大塚家の人々の学芸・書画に対する関心の程が窺われる記事が司馬江漢の『西遊日記』に見える。そこには、珠水、曲阜の「兄弟が江漢を厚くもてなし、江漢の「蠟画」、「地球の図」に非常に興味を示している様子が記されている。兄弟は江漢が静岡に置いてきたそれらの「蘭物」を見たいがために、往復十里の距離を飛脚を走らせて取り寄せたという。

五代目甚左衛門正儀は亀石と号して文雅の事を好み、画や和歌の他に謡曲も巧みであった。亀石の五男荷漢は、画を勾田臺嶺、中林竹洞、漢学を柴野栗山、詩を菊池五山、大窪詩佛、柏木如亭らに学んだ。享和三年版『東海道人物志』の藤枝驛には甚左衛門は謡で、治平・(荷漢)は漢学・詩・書・画で掲載されている。大塚家には東海道を往復する文人墨客がしばしば立ち寄り、荷漢の師友に加え、玉堂の他にも玉堂の長子春琴、池大雅、高芙蓉、司馬江漢、山本梅逸、市川米庵、巻菱湖らの画人、書家、梁川星巖、石井繩齋、頼杏坪らの儒者などと多彩な交遊を持った。

大塚荷漢は安永七年(一七七八)駿河藤枝町(現、静岡県藤枝市)に生まれる。弘化元年(一八四四)没。荷漢は名を正弘、一名碧、字が風暁、通称治平、のちに家督を継いで六代目甚左衛門を襲名、その書齋は香遠山房と称した。父亀石譲りの風雅

は荷漢の代に至って頂点を極め、荷漢は画・詩・漢学・香道・茶道に通じた。詩社江山社を運営し、香遠山房を舞台に客人と席画や詩の応酬を試みた。茶道は千家に入門、骨董の鑑識にも詳しかった。

大塚家、大塚荷漢については以下の文献を参考にした。

『静岡縣人物志』 昭和四十九年 静岡県

『日本人名大事典』 一九三七年 平凡社

『近世人名録集成 第二巻』 昭和五一年 勉誠社

『静岡県歴史人物辞典』 平成三年 静岡新聞社

『藤枝市史 上巻』 昭和五五年 藤枝市

『司馬江漢考』 中野好夫 昭和六十一年 新潮社

『江漢西遊日記』 東洋文庫四六一 芳賀徹 太田理恵子校注

一九八六年 平凡社

(2) 『浦上玉堂畫譜』(田中一松他 昭和五十二年)昭和五十四年

中央公論美術出版) 整理番号一七八・二二四・二五一

(3) 本書簡巻中に差出人が玉堂、送り先が荷漢の荷物一箱の受領書があるが、そこに田畑屋五郎左衛門の署名と「霊岸島東湊町田畑屋」の黒印がある。

霊岸島東湊町は現在の東京都中央区新川二丁目あたり。霊岸島は霊巖島とも書く。日本橋川と亀島川にはさまれた島で、現行の新川一、二丁目のうち。寛永元年霊巖雄誉上人が霊巖寺を建立したことから霊巖島と称された。明暦大火後、霊巖寺は深

川に移転し町屋が開かれ、以後埋立が行われた。東湊町は靈巖島東南部、水運の便がよく、明治期にも各種問屋が集中していた。(『角川日本地名大辞典 一三 東京都』 昭和五三年 角川書店)

(4) 張月樵(一七六五—一八三二)

名古屋の画家。名は行貞、字は元啓、月樵・醉籟堂と号す。

通称管蔵のち快助。近江彦根の表具師の子として生まれる。少より画を好み市川君圭に学ぶ。上京し呉春に入門、寛政年間に名古屋に移る。小林竹洞の師でもあった山田宮常の粉本を臨写し、画風が一変したという。後に画名が高まり藩命を受け御殿の障壁画も描いた。(『日本人名大事典』 一九三七年 平凡社)

(5) 平岩元珍(?—一八一八)

尾張徳川家の家臣平岩元敦の長子。幼名猿之助、通称重右衛門、後に遠次郎、桂圃と号す。天明六年(一七八六)家を継ぎ、文化八年(二八一二)には書院番を勤める。幼い頃から読書を好み、初め須賀亮齋に学び、後に中村習齋に入門。音律を考究し宮原順秋その子文秋に楽器を学び秘曲を極める。音楽に関する著書を多数著した。(『名古屋市史 人物編 第一』 昭和九年 名古屋市役所)

(6) 森銃三「玉堂小記」(『畫説』 昭和十五年八月號 東京美術研究所、『森銃三著作集 第三卷』 所収 一九八八年 中央公論社)

(7) 書簡中の書籍については以下を参照した。

『四部総録芸術編』翻刻版 丁福保・周雲青編 一九八四年 文物出版社

『大漢和辞典』 諸橋轍次 昭和三十五年 大修館書店

『新潮世界美術辞典』 昭和六〇年 新潮社

(8) 鼎春岳(一七六六—一八一四)

大坂の人、名は元新、字は世宝、俗称太郎右衛門。福原五岳に画を学び、のちに諸派の画法を研究した。(『近世の大坂画壇』 展図録「画家略伝 昭和56年 大阪市立美術館、『竹田とその交友たち』 展図録「作家解説 平成六年 大分県立芸術会館」)

(9) 玉澗(一七五一—一八一四)

近江国栗太郡南山田村の生まれ。名は正遠、法号疊空、淵々齋・墨石堂などと号した。文化元年山城国山科来迎寺に入り、のち京都東山禅林寺に入門。晩年は郷里の西光院に隠退する。

(『竹田とその交友たち』 展図録「作家解説 平成六年 大分県立芸術会館」)

(10) 森銃三「浦上玉堂傳の研究」(『美術研究』 第九十五・九十六號 昭和十四年 美術研究所、『森銃三著作集 第三卷』 所収 一九八八年 中央公論社)

(11) 右同書

(12) 松浦東溪(一七五二—一八二〇)

長崎の人、姓はもと団氏、小野氏の養子となり、さらに松浦氏に改める。名は陶工、字は君平、通称恵八のち文平、東溪・

東溪山人・競秀亭主人などと号した。長崎正覚寺住職寂淵に学問を、来船清人朱緑池に詩を、来船清人楊伯頌に画を学んだ。

(12)「竹田とその交友たち」展図録』作家解説 平成六年 大分県立芸術会館)

『竹田荘師友画録』に「松浦陶」として載る。(『大分県先哲叢書 田能村竹田 資料集 著述篇』 平成四年 大分県教育委員会)

(13) 玉堂が写本七冊三両で斡旋した『楊誠齋集』は荷溪の購入するところとなつたらしく荷溪の蔵書目録には「一誠齋集 写本金六兩三分二朱」の記載がある。(『静岡県史 近世 文化編(二)』)

(14) 『浦上玉堂畫譜』(田中一松他 昭和五十二年 中央公論美術出版) 整理番号二七三

なお、本論は花王学芸員研究補助制度による助成の成果を一部利用した。

(かわのべ やすなお)

図版1—①

(端裏書) 亥正月十四日
 此間曲追便ニ愚書呈上仕候
 御落手被下候哉如何舟便之もの
 餘り遠着故ニ今日田畑屋江聞
 ニ遣し候所松村之舟今貳艘品
 川ニ懸り候由大方不遠内ニ着
 岸可有之候
 ○此度此兩品見当り申候所
 小々急なるもの故ニ早便ニ
 申付候先達而追代詩
 さし上申候御落手被下候哉若
 御氣ニ入り不申候ハ、御返却
 可被下候
 ○去夏御染物之節金子残
 壹分ト五匁程も有之候ニ
 寛へ申候
 左候得ハ旧冬御預り返り候
 金と兩口、而壹兩三分程
 少々過ニ相成可申候今日者
 取返故ニ次便ニ委敷勘定
 書さし上申候

図版1一②

一三二寸肉口（箱カ）壹つ

右は金壹兩ト式匁

一染付杯壹ハ

金三分

右之両品同夜早便ニ而申付候

直段ハ一篇も引なしニ御座候

御氣ニ入り不申候ハ、早速ニ御返却可被下候

一次便ニさし上申候品者四角

茶盆是ハ舟便者餘り遠着

故ニ並便ニ申付候

一茶盆 四角壹尺壹寸四方程

唐物唐細工紫檀のふち

鏡板唐木木目よし

婦ち□□（菜只カ）のほりあるよし

右之品者

代金式分式朱

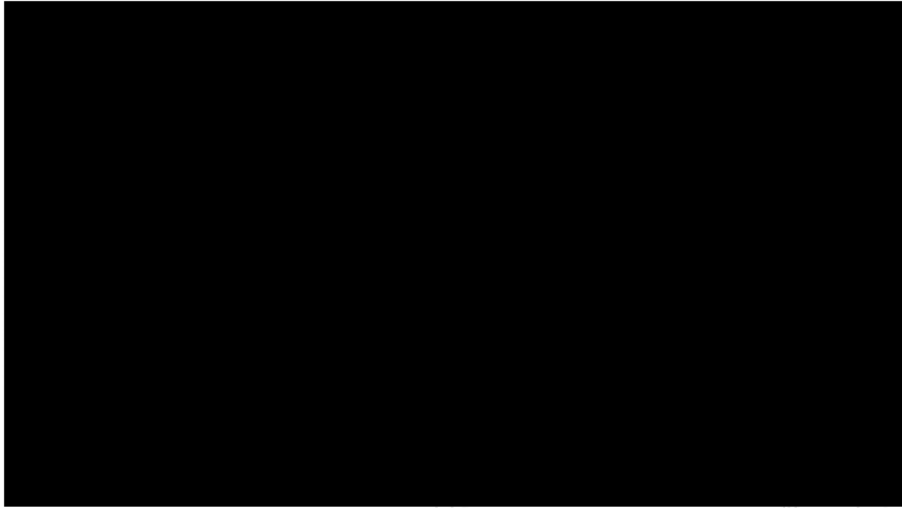
是ハ次便ニ申付候次手ニ筆

入御覽候



図版 1—③

- 銘純羊毫 代壹本
 (筆略図)
 銘羊毫 壹分
 (筆略図) 代壹本
 玉箸飛香 十三匁
 (筆略図) 代壹本
 何も白毛大極上物尤玉箸 八匁
 飛香ハ五本有之壹本者
 賣レ不申候外式通ハ四五本
 ツツ有之候一向沢山者無之もの
 追て又次手ニ懸御目候間若御
 氣ニ入り不申候ハハ御返却可被下候
 ○四角太平 是又性合堅地ニて候
 大方式分位と可被思居候
 ○三ツ物のせと大方同様歟ニ
 御座候
 ○させる兩三日中ニ出来物是
 ハいまた出来上り不申候而ハ筈と相
 知不申候得とも観世水深ほり



図版 1—④

并ニ金免つきと申而ハ大方式拾
匆見当も相成へきや乍然

成丈下直ニ申付置候得とも

先様のくち様ニ御承知可被下候

○先小生方へ金壹両三分御渡

候と被思召御入手ニ相成候品者

大方御む祢の御勘定にて不足

の分金子御下可被下候

委曲者次便ニ申上候

○小生去冬御頼申上置候玉之儀

可相成被下候御働奉願上候若万一

御不都合之儀も有之間敷候間

御心配被下間敷候

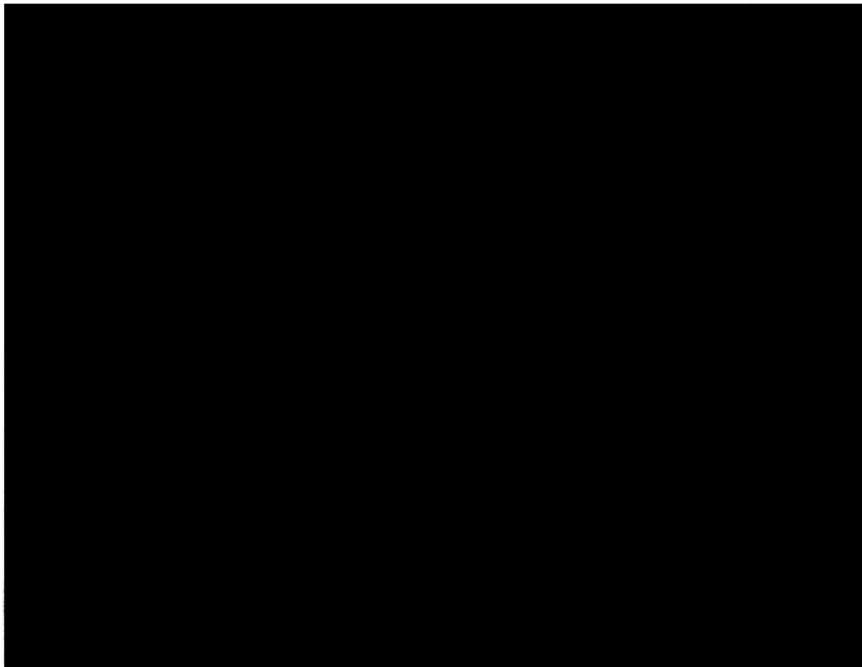
正月十一日

荷浜大翁

此間肉池大小之事林伝十便ニ申上候
又々此節同様四兩位にて者免而候

唐皮の面白きものもあり

希候先之方よし



図版 2

清暑御ざ候全家御徳祥ノ被為入奉寿候日外一書ヲノ發し候相違候乎
右書中ニモノ申上候沈石田集有之候李竹ノ籟手ニ入筋有之候いづ
れノ急ニ金子御廻し可被下候写しノ取かゝり候而茂前金少シも遣
し不申シテハ始メ不申候間ノ金子御上し可被下候小子被存候ノ貧生
トリカヘ金子所ニ御ざ候ノ而まち合被申候間奉頼候前ニノ御渡し下
され候金子百匹ノ

(巻頭に戻る)ノコリ有之候かヒモ寛束ナクノカサ子テ御覚候通ク
ワシクノ御書付可被下候扇面ハノ百四分申付出来いたし候ノ是モ天
王寺ヤ御ワタシ可申候乎ノ尾州ヨリ白手ノ茶椀ノさし上ゲ申候アノ
通ノ大ブリノ人モチい申候隨園庭話ハノ新板有之候而留遣帳ノ御ざ
候事外ニモ御新刻ノ有之候モノハ御申越しニ可ノ被下候王断しモ
ノノタノミ置申候大津ノ楓亭ノ如此御ざ候而御氣ニ入りノ申まし
候御画帖ノ寸法ノトリ落し申候存外ノ多用万事失念仕候ノ不具

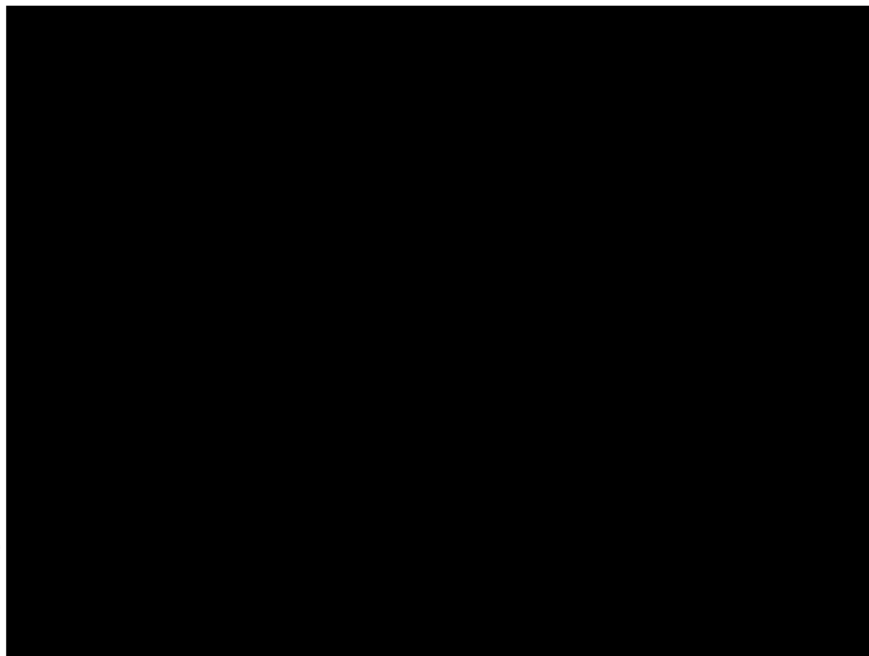
六月十一日

荷溪老兄 玉堂宛

(粹外)

尾州ニテモ三兩三分三月間出候ヲ品トトノヘノ追々頼ミ置月樵モデ
キ不申外ニ来山モタノミノ出来不申金有ト申ヲ過日さし出申候画
人ノ毎々ノ約束ノ相違ノいたしノコマリノ申候此間ノ鳥羽ヘノモ
參ノ頼ミ置候ノ乍相候ノキヌ地ノ無之ノナンギノいたし申候ノ金
子ノ思付候ハノトトノヘノ可申候ノ金子御算用ノ可被下候

(ノは改行)

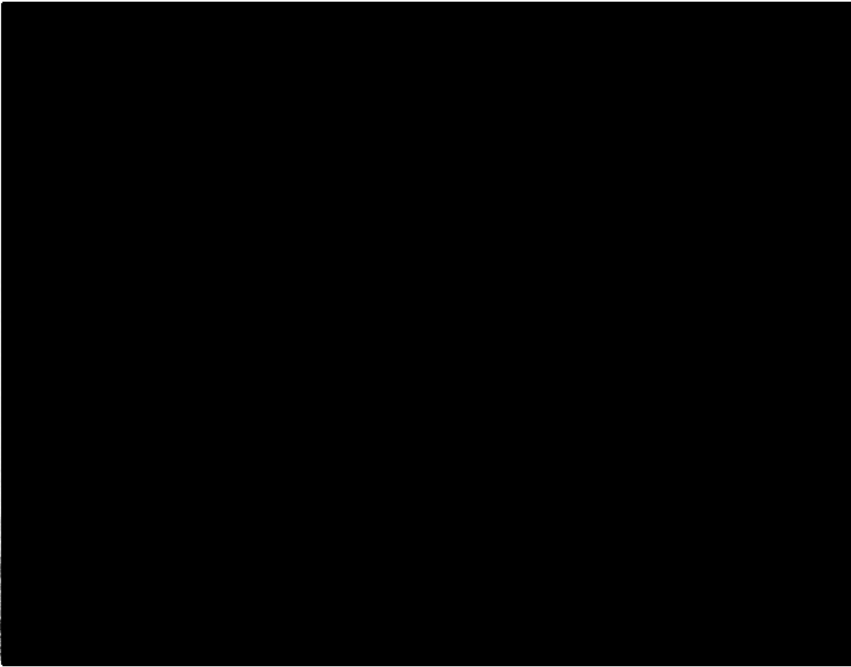


図版 3-①

○玉隣小画ハ銀一兩ニ御
算用可被下候○マチや原
ヨリ頼マレ申候ニ付玉隣
大幅ノ竹ヲ遣し中候
御トドケ可被下候○ヤドヨリ
一人雅客出坂ニテ舞ヲ
所見申候子孫用之小子
博古図て文字
有之候ホシク御ざ候三十二兩ハ
申候が力ニ及かたく候事

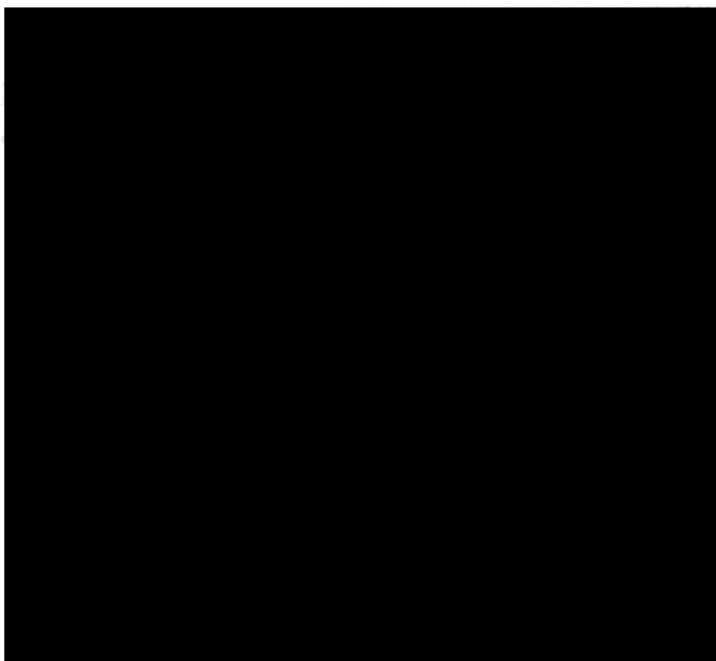
(文頭)

平安ヨリ再三書ヲ呈し候相
違申候乎天王寺屋相尋候
處御状久しく来不申由申候
如何与案し申候○兼而御約束
仕候竹籟集之事モ申上候
平安ニテ暑ヲ通し而八月一日
ヨリ大坂へ下り以申候早速兼
葭堂之家内へ相尋候而遺物
を相尋候處書籍文房類
ヨキ品々ハ公儀へ上り餘品モ数々
風自家申請候事与被存就中
○雪菴譜史ハ外ニ御坐候金三兩御ざ候
写本 竹籟集ニ御ざ候
事○竹籟說鄂十二卷 金四兩
金三兩



図版 3-②

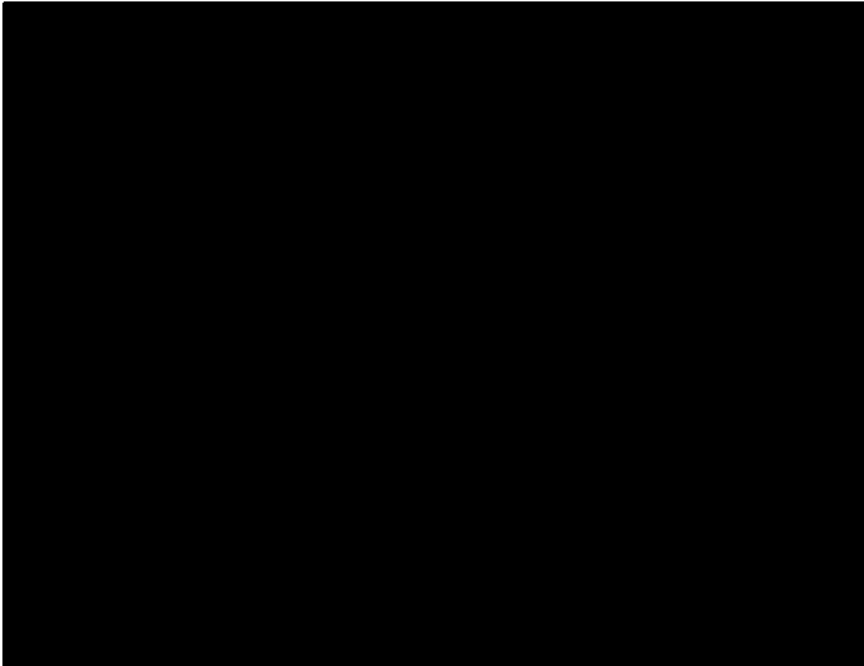
- 書院叢説十九卷合四冊
- 読書敏求記二冊○第一之
金三匁ニ申候
- 珍書ハ鉄網珊瑚十本御ざ候
唐本 (曾而御はなし)
- 清河書画舫二套真然日
申上候果アン日録
- 録一套寶繪録一套清
ニテ御ざ候事
- 秘蔵右一箱八匁十兩御ざ候
事はハ別而風自書ニ御ざ候事
別紙書付ヲモさし上申候○
何卒是ヲバ一所ニ御求メ
被成可然候奉存候価ハ此方
ニテ子ギリ付ケ最早御可行
ト申事ニ御ざ候竹籟ノ集ヲ
天地堂詩集トテ別ニ有之候
是ハ梅臣トリツギぬしヘ
ウリ申候而此方ニ御ざ候事はモ
うつし可相成志かし写しハ
急之間ニ令申ましく候事



図版 3—③

○金子御イソギ澤山ニ御
 上シ可被下候大坂高麗橋筋
 心齋橋スジカドヨリニケンメウラニ居ル
 上人町布屋新左衛門家ニ宿し
 罷在候事是へ向テ御上シ
 可被下候事候○六意ヤキ
 殊外不自由とハアレバ式朱
 價ニ御ざ候事ヨキ中渡候茶
 碗見付候アトヨリ下し可申候いづ
 連金子小子不自由御ざ候
 春岳へモ
 画帖乞置申候事
 頓首拜白
 八月五日
 荷浜様 玉堂

○兼葭ノアトニマタ色々雅画ノコリハ申候事三十匁当銀ナラデ不召
 申候



図版 4

(粹外) 長崎へハ十月又ハ明春
 発し申候大坂琴行ハレ申候

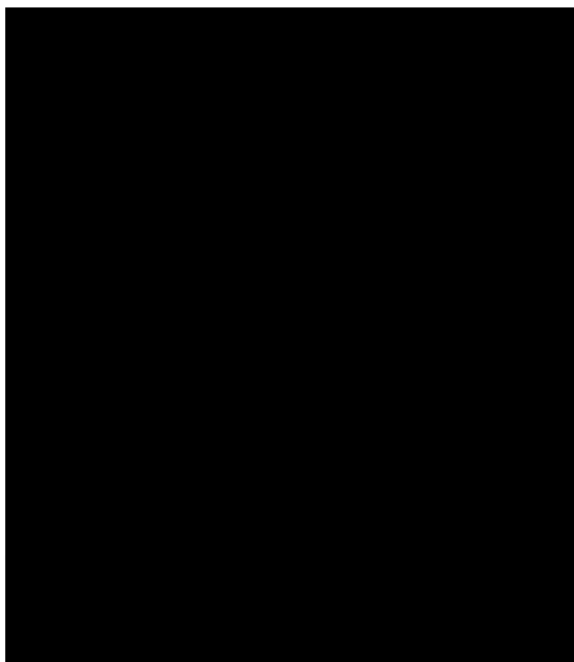
自京非数通発候
 所一度茂御返事
 無之相達候乎無之
 御らん奉存候高居候
 勝手ニ存候○御望之
 李竹籟集并数種之
 珍書付さし上候御読飛
 乎何分ニモ小子貧士之

(巻頭へ戻る)

事故金子取カへかたし
 空しく宝物ヲ取逃し
 中事而申候可惜事ニ候
 ○此度荷葉之小茶
 碗五ツさし上申候
 十三兩五分ニ御ざ候
 下直之品ニ御ざ候故
 押而折メさし上申候
 匣代八分モかゝり
 申候まし此画ノかミ代
 モ有之百匹御当御存し
 可被下候過日玉隣
 墨竹モさし上申候以上

九月九日

荷溪様 玉堂琴客



図版 5-①

(粹外) 大坂逗留明春二月初
迄之事ニ御さ候

写し出来候ハカ凡三
両アマリ カミトモ 代から

外二百匹ハ禮とし而

御手ニ入申候元本

ニ相達候ハ、花史與

劍掃三部ニテ

七両ニ朱御さ候事

ニ存寄御さ候て

可被写助候

ウツシ代紙代ハ

御引替ニテ御渡し

可申候与申事ニ候者々

(文頭)

尔後絶壹之

直答如何承度奉

存候寒中時至候

御自玉可被成候事

写本



図版 5—②

○去リ年来大坂より
 発書候相達候乎御返事
 無之市川へモ一書仕候
 が若御不例カト案し候
 此節御安静御さ候与
 奉賀候小子長崎ヨリ帰大
 坂逗留いたし候明春ハ
 東海道帰節いたし

可申候

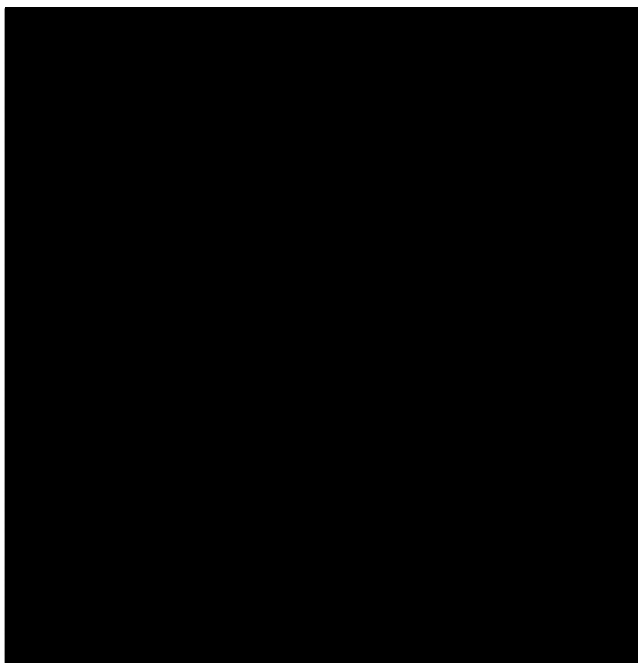
○御頼之李竹籟

六研齋与申十二本

御ざ候此節かり出候

(巻頭へ続く)

(粹外) □書上候品、送奉託候以上



図版 6-1①

(端裏) 此御返事

御イソキ

○長崎へハ

正月ニ参候

書付ヲ直ニ差上候處

有之書相違候乎御返事

日々奉待候四日市ニテ

五山ヨリ申来候兩人

トリ申度与申事ニ付

此節急ぎ写越え

御手ニ入可申ラクレ候ハ、

御手ニ入申ましく候へ者

急便申上候如何

(文頭)

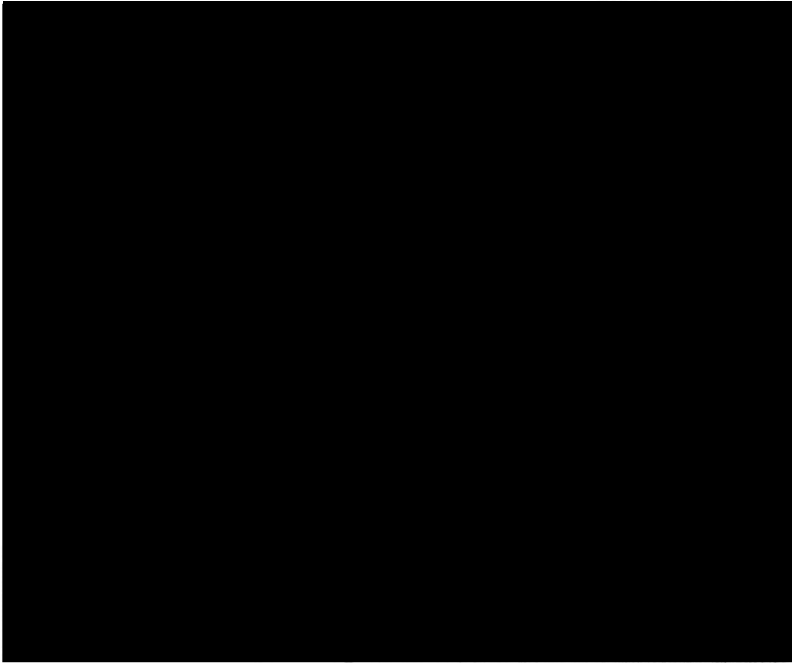
別来御疎絶時々発

置候處御返書不来

頃日承候得者東都

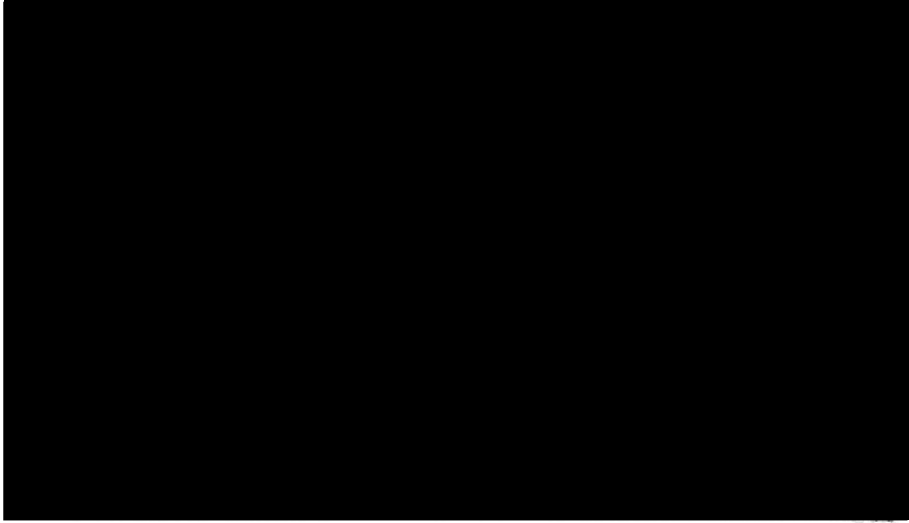
御越し被成候由先噴

御盛状奉以寿候



図版 6-②

- 先書中ニ申上候李竹
 (十二冊)
 籟集写し有之候テ
 四兩
- 金三斤半(抹消)ト申事ニ御さ候
 森川方ニ有之候○外ニ
 ○清河書画舫二套 珍書
- 真跡日録 一
 鐵網珊瑚
 十本
 金三兩二分
- 寶絵録 一
 ○清秘藏 一冊
 ○書院叢説 十九卷
- 右一箱價十兩
 珍書
- 劍掃 ○小窓清記 外記層記
 艶々トモ
- 雪菴清史
 右之品兼葭所藏御さ候
 望外御手ニ入候事ニ付森川
 大坂薩摩堀願前寺居候
 十二月廿日
 荷溪様 玉堂
- 序ニ小画モさし上三亥ニモ書画さし上如何



図版 7

金壹兩二分ニ限り

六月九日出候状中

内

○貳朱 竹石山水画料ニ当

○壹匁五分 同画箋代

○七匁 薩摩小土瓶 三ツ
舟廻し

○三匁五分 東溪画料

好渡スミダ川

○百五十六錢 同ヌメ二斤 画帖
寸法

○八十ト 箱貳ツ代

百文ト

合壹分貳朱トナル

残り壹兩貳朱アツカリ

内

○壹兩八分 後絹二枚アトヨリ

○五匁二分 白ヌメキレ

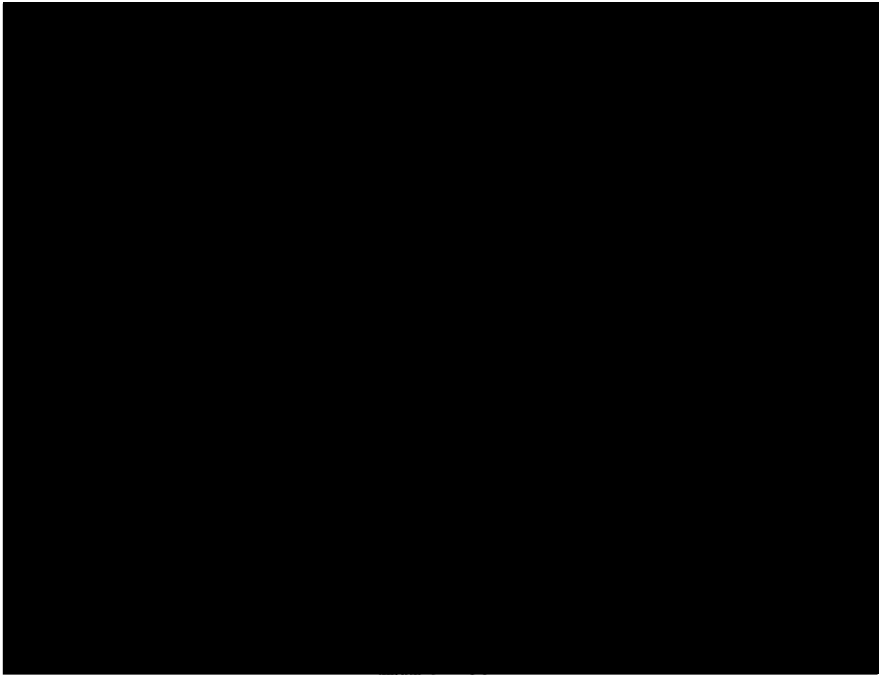
○百文 土瓶箱ノ上半

○四百三文 増山侯之
杉折 上ル画筆

○貳朱 御用人看代(消去)

○百五十 運賃

(粹外) 合銀七匁錢六百五十三文 / 貳朱ト六百ノ御ふり 残り 三
歩貳朱ハ貳百三十二文



図版 8-①

記

古渡一字無漫滅

一書函舫 寶繪錄

真跡日録 清秘藏

右箱入 四大套 唐本

金拾両

惣名李竹妍說部全書ト云

一六研齋筆記 二筆

三筆

一紫桃軒雜綴五綴

右写本 其外面積墨君題跋類

雜事の本全部十二冊

価金四両二分

朱珍郎之著

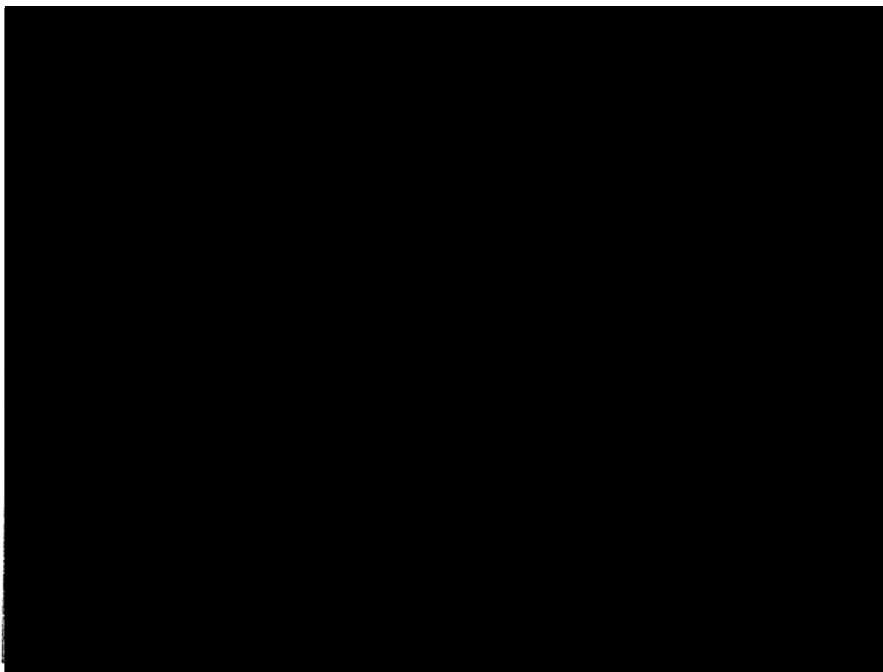
一鉄網珊瑚 写本

十本

箱入 書画ノ事ヲ評し本也

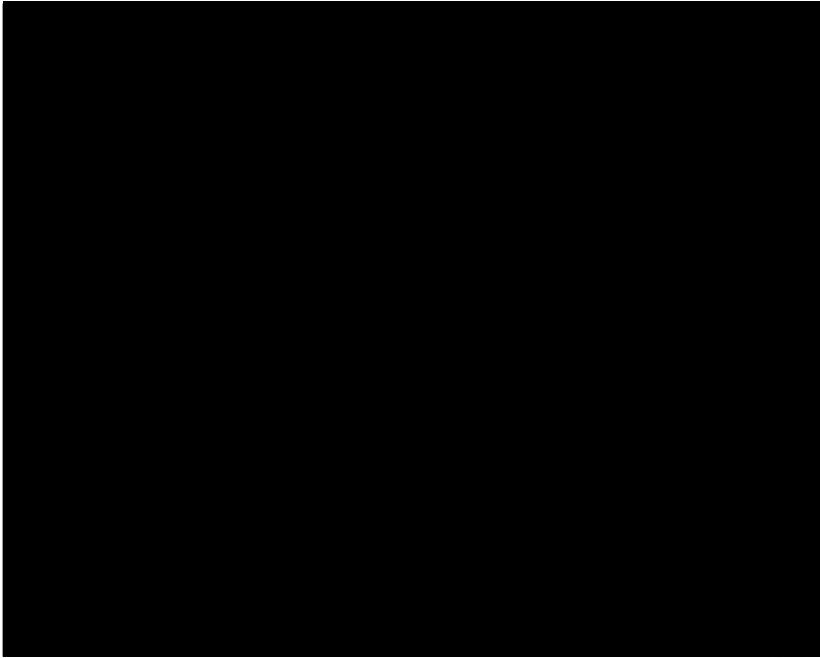
至而珍書ニ御さ候

価金四両



図版 8—②

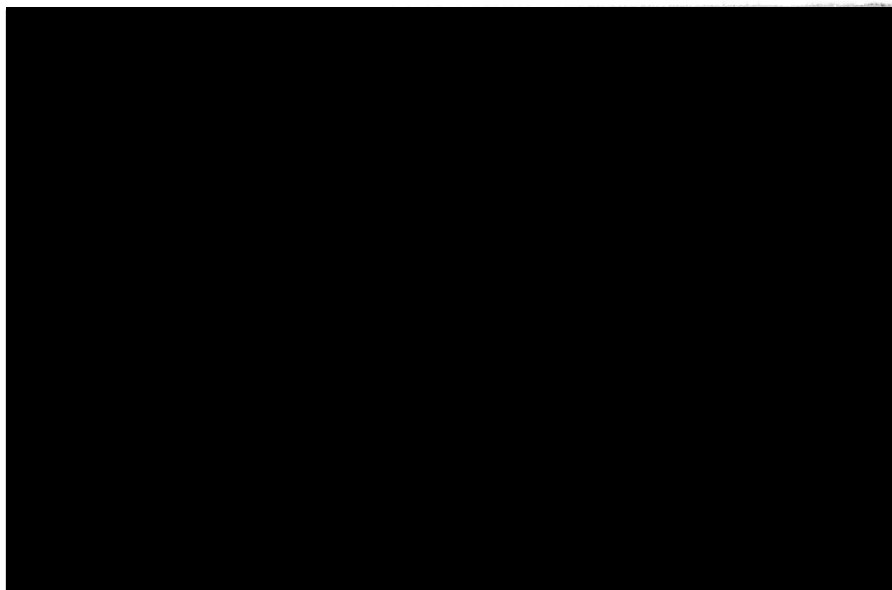
- 一 楊誠齋集 写本
- 代金三両 七冊
- 一 読書敏求記 写本
- 二冊
- 是ハ至而珍書也唐ノ君手書
- 一 覽の類
- 代金二分
- 二朱
- 一 書院楽前説 写本
- 隨筆也 全十九冊 合四冊
- 代金三両
- 唐本 合
- 一 雪菴清史 三冊
- 是ハ大雅堂持本兼葭堂ニ讓候本
- 甚雅事ナルモノ也
- 代金三両二分



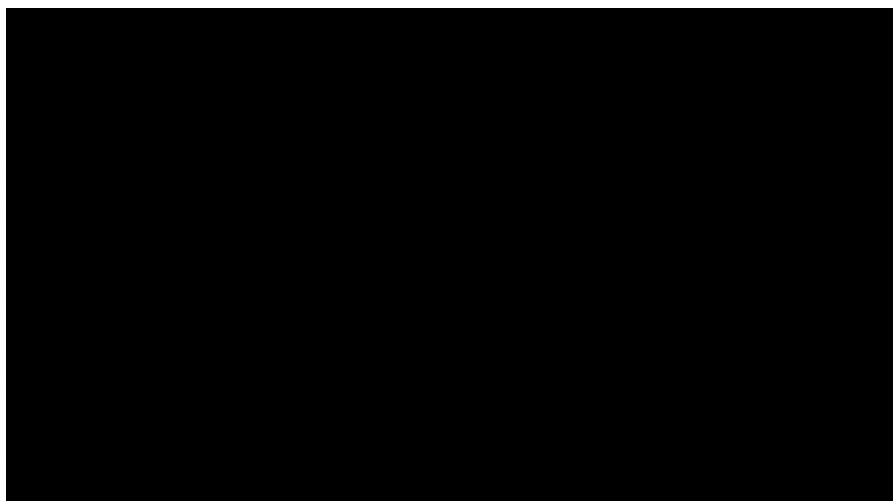
図版 8—③

右珍書ニ御さ候書付候
 値ニ候ヘハ御拂申度候急候
 ても無之候へとも内々
 入用之義も否何卒
 早々御返事被成可被下候
 右珍書之事ハ書林迄
 なりとも御聞合わせ可被下候
 世上に者一切無之もの
 計ニ御さ候以上
 森川貴書

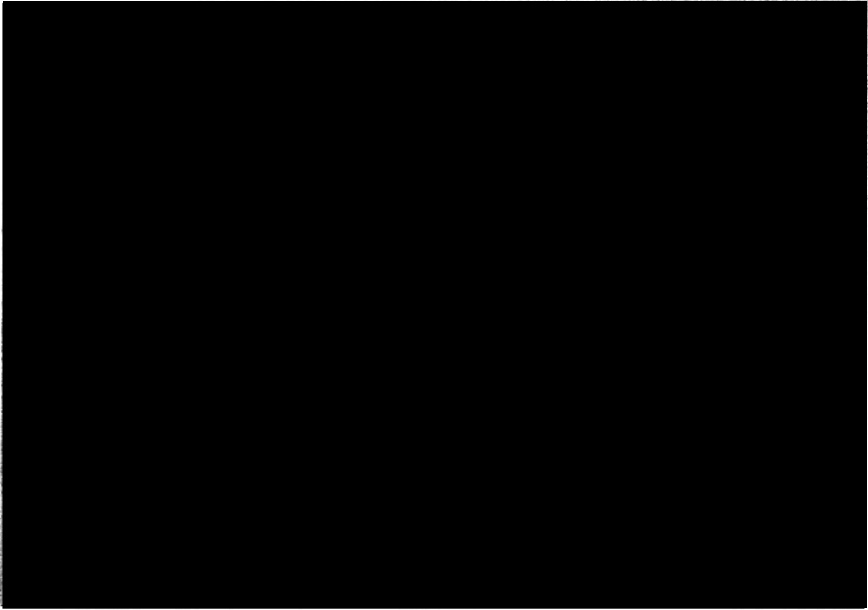
玉堂老兄 兔左衛門



<図版 9>



<図版 10>



<図版 11>



<図版 12>

〈図版9〉

駿河藤枝宿白子町ニテ別ニ小箱

添付アリ

大塚治平様

浦上玉堂

江戸三田綱坂やヨリ

素(朱印)

運賃六十四銭

スム

奥羽屋正左衛門様ニテ

十月六日落書候

〈図版10〉

諸名家書簡

府中七間町

初川長左衛門様 紀玉堂

註封 荷渡様ヨリ可奉候

下され度奉残候

〈図版11〉

玉堂先生

御貴下

九老

拜

先日ハ御高来始而得拝眉恐悦

且曲尽を御為聞有かたく

其趣之小画相健可申御高見

被下度候新賀僧もさし上られ候

殊外多用鹿書御高覧候 頓首

〈図版12〉

覚

一箱老つ

右者藤枝大塚治平殿行

箱荷物髓ニ(以下、未読「受取申候以上」か)

七月三日 田畑屋五郎左衛門(黒印)

浦上玉堂様